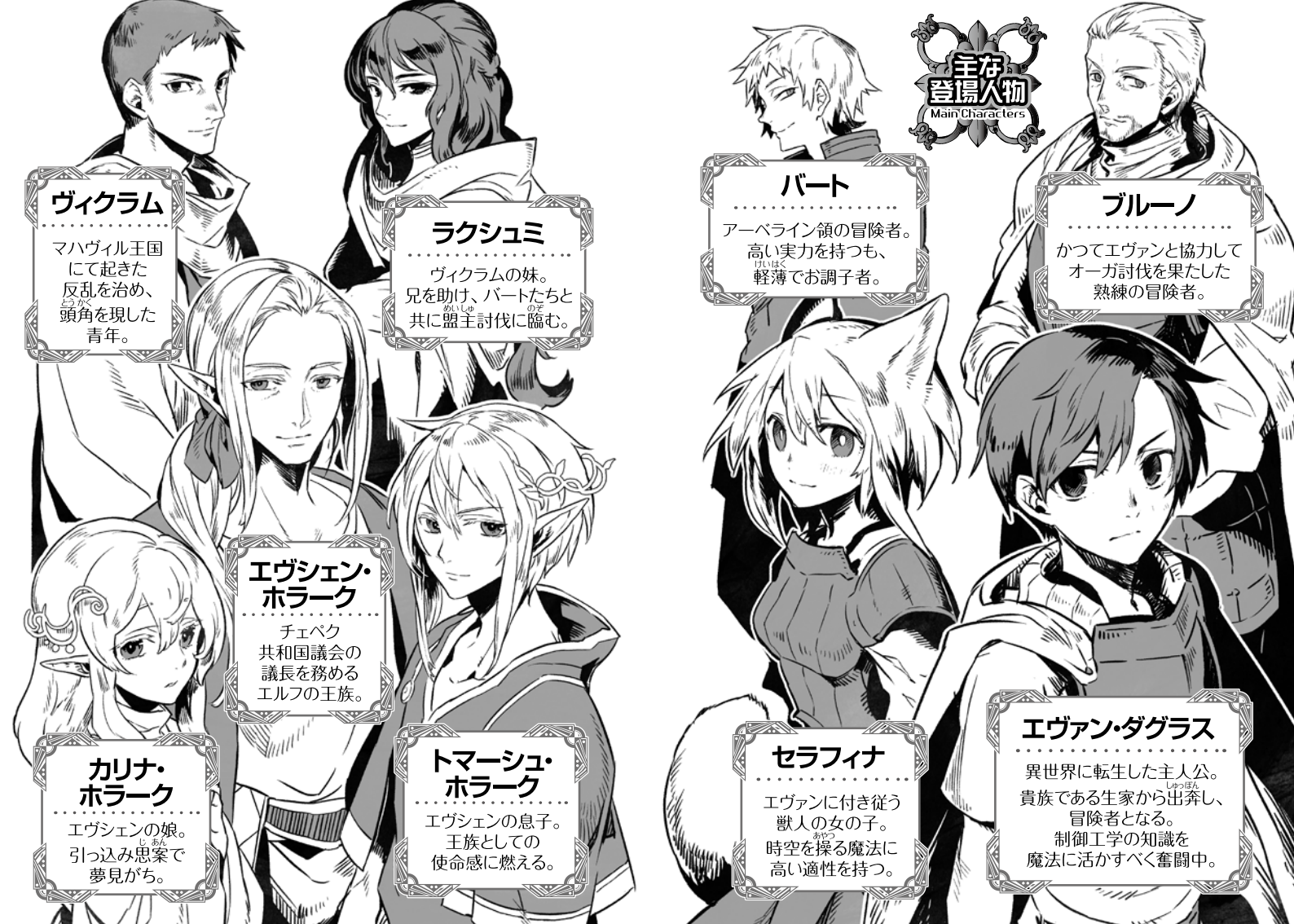
異世界を制御魔法で切り開け！３

ＡＬＰＨＡ　ＬＩＧＨＴ

佐竹アキノリ
Akinori Satake

アルファライト文庫


主な登場人物
Main Characters
ヴィクラム
マハヴィル王国にて起きた反乱を治め、頭角を現した青年。
ラクシュミ
ヴィクラムの妹。兄を助け、バートたちと共に盟主討伐に臨む。
エヴシェン・ホラーク
チェペク共和国議会の議長を務めるエルフの王族。
カリナ・ホラーク
エヴシェンの娘。引っ込み思案で夢見がち。
トマーシュ・ホラーク
エヴシェンの息子。王族としての使命感に燃える。
バート
アーベライン領の冒険者。高い実力を持つも、軽薄でお調子者。
ブルーノ
かつてエヴァンと協力してオーガ討伐を果たした熟練の冒険者。
セラフィナ
エヴァンに付き従う獣人の女の子。時空を操る魔法に高い適性を持つ。
エヴァン・ダグラス
異世界に転生した主人公。貴族である生家から出奔し、冒険者となる。制御工学の知識を魔法に活かすべく奮闘中。

1

チェペク共和国は、その東西において文化も種族構成も大きく異なる特徴を持っている。西にはドワーフたちが住んでおり、炉には盛んに薪がくべられ、煙突からはもうもうと煙が上がり、作業着を着こなした男たちがつるはし片手に朝から炭鉱に赴く。一方、東にはエルフたちが住んでおり、日夜畑を耕し木々を愛で、小鳥のさえずりを聞いて詩を口ずさむ。

気性も生活様式も全く違うこの二つの種族が一つの国に纏まっているのは、皮肉にも他国に戦争の気配があったことが理由だった。

ドワーフとエルフは十年ほど前まで互いを敵と見なして、戦争を繰り返していた。だが、北のハンフリー王国、東のマハヴィル王国が力をつけるにつれ、対抗する策を練らなければならなくなった。

しかしここチェペク共和国は南方、西方を海に囲まれており、同盟を結ぶ相手など存在してはいなかったのだ。唯一、長年剣を向け合ってきた相手を除けば。

そこで名目上は、互いの発展のため、豊かな暮らしのため手を取り合ったのだが――

リボル・ザオラルは今日何度目かわからない嘆息を、周囲に聞かれないよう小さく漏らした。

彼は共和国議会の議長を務めているドワーフの男で、齢は五十を過ぎ立派な髭を蓄えている。本来の姿は威風堂々としていたものの、今は小さくなりがちだ。本人はそのことを自覚するなり、すぐさま居住まいを正すのだが、そうしたところで彼の憂慮が取り除かれるわけでもない。

それでも彼には、弱腰であると見られるわけにはいかない理由があった。

この議会には、議長が二人いる。それは通常どの国家においてもありえぬ状況だったが、そうせざるを得ない理由がある。ドワーフとエルフ、どちらが国家の長となるかで揉めに揉めた挙句、いよいよ東方のマハヴィル王国が軍事行動に乗り出すとの情報があり、ならば一時的にでもと慌てて両種族から議長を立てて発足させたのだった。

結局は杞憂に過ぎなかったのだが、一度決まってしまったものは容易く変えることができず、そのままの制度が以降十年続いてきた。

リボルは向かい側に座っている男を見遣る。逞しく武人とも見られがちな彼とは対照的に、立ち居振る舞いも姿そのものも優雅で、宮廷で詩をそらんじているのが似合うような貴人だ。

エルフの議長、エヴシェン・ホラークである。古代王朝の末裔だと噂されているが、武

骨で煤に塗れて生きるドワーフたちからすれば、そんなものは『気取った』様でしかない。端的に言ってしまえば、気に食わなかった。

エヴシェンはリボルの視線に気がつくと、柔らかな笑みを返した。リボルとて、この男が嫌いというわけではないのだが、周囲に並んでいるドワーフたちの心境を慮ると、仲良く手を取ってもいられないのが実情だった。

「では、砦の兵からの連絡につきまして、述べさせていただきます。ハンフリー王国からは『盟主』討伐の名目で斥候が送られてきていますが、その実、こちらの動きを警戒しているものと思われます。また、マハヴィル王国も国境の警備を強めており、緊迫した状態が続いているとのことです」

男が述べると、この場の誰もが浮かない表情になった。が、すぐさまエルフの男が発言を求める。

「では、こちらも警備を強めねばなりますまい。兵と糧食を用いる許可を」

マハヴィル王国があるのは、エルフたちが住む地域の東だ。そちらの武力を強めるということは、エルフたちに有利に立たれることと同義で、当然ドワーフたちはそれを快くは思わなかったが、弁が立つ者もおらず、ついには許可されることになった。

このように議会は、エルフとドワーフが互いに相手をやり込めるための場と化していた。

会議が終わると、それぞれの種族は顔を合わせることなくその場を後にする。

エヴシェンは彼を囲む議員たちと挨拶を交わしつつ、その向こうに少年と少女、二人の姿を見つけて、それまでとは違う柔和な笑みを浮かべた。取り巻きたちもそんな彼の視線に気がつくと、優雅な一礼を見せる。

「父上、いかがでしたか？　日々、民の不安は高まっております。どうか、御一考を」

「おお、トマーシュ。なに、案ずるでない。この国を守らんと思うのは、誰もが同じであろう」

エヴシェンの長男トマーシュは、今年二十歳になる。まだ幼さが抜けきらないものの、民からはいよいよ王族の風格が出てきた、と噂されていた。

そして彼の後ろに隠れるようにしつつ、父の様子を窺うのは長女カリナ。権謀術数が渦巻く宮殿においても穢れなき姫君であると評判の大人しく淑やかな少女は、民からはまるで我が子の如く慈しまれている。

そんな若き次代の希望を前にしてエルフたちが俄かに活気づく中、議会には相応しくない格好――鉄の鎧を纏った男たちが入ってきた。佩剣こそしていないものの、その逞しい腕で一ひねりすれば、ひ弱な文官など簡単に絶息しそうな威圧感がある。

彼らドワーフたちの先頭にいた男、ヘルベルト・ボチェクはリボルの姿を認めると、頭を垂れた。

「ヘルベルト・ボチェク、魔物どもの制圧を終え、帰還いたしました」

「おお。して、どうであったか」

「は。民一人とて傷つけさせてはおりませぬ。昨今の食料不足により、やつらめはたまた人里へと降りてきたようで――」

ヘルベルトの報告を聞きながらリボルは、似合わぬ、と思わずにはいられなかった。一度戦いとなれば、鬼神の如き働きを見せるにもかかわらず、ヘルベルトが報告で最初に口にするのは、決まって民のことであった。

このヘルベルトという男、帰属意識が非常に高い。しかしそれはチェペク共和国に対してではなく、ドワーフの集団に対してである。

その彼はちらりとエルフたちを見て、内心で悪態を吐く。

（これでは戦中と何ら変わらないではないか。戦場が議会へと移行したに過ぎん）

エルフたちが立案した政策で苦しめられている同胞がいると思うと、ヘルベルトはいてもたってもいられなくなる。

そして歴史以外にも、エルフとドワーフの間には大きな溝がある。宗教の違いだ。

ドワーフたちは異界魔神教から分かれた宗教――亜人と魔物は別の存在としつつも、カール・リンドを亜人たちの先導者であるとしている――を崇拝している。

一方でエルフたちは自然精霊教から派生した宗教を信仰していた。自然そのものが信仰対象であり、とりわけ神木に宿る大精霊と呼ばれる存在を重要視する。神木はエルフたち

の住まう領域に生えており、日夜教徒が礼拝に訪れているという。

急な融和政策のため、両者は対立することがたびたびあった。有名なのは、かつてエルフとドワーフの国を分けていた国境付近にあったドワーフの村の出来事だ。

エルフの難癖から始まった小さな諍いは次第に膨れ上がり、やがてドワーフは武器や農具などの生産品のうち、粗悪品ばかりをエルフに渡すようになった。腕に誇りのある彼らにとっては苦渋の決断だったに違いない。

そしてエルフもまた、やられているばかりではなく、彼らへの食料供給を断った。ドワーフは貧困に喘ぐようになり、男たちは我慢ならぬと一斉蜂起した。

乱はすぐに収められたが、大きな禍根を残すことになった。

ドワーフの乱を収めたのはエルフであり、彼らは復興を名目に兵を引かず、そのままドワーフの領地を奪ってしまったのだ。

彼らの対立はこれ以降、また深まっていった。

ヘルベルトは貴族然としたかつての敵を見ながら、その瞳に明らかな敵意を宿らせていた。

2

ワッカ共和国の南に、チェペク共和国との国境がある。エヴァンとセラフィナはそこで間諜の可能性があるとして、足止めをされていた。

そうなったのも、全ては検問の兵が目敏く彼の佩いている剣の家紋に気がついたからだ。提示した冒険者証にもエヴァン・ダグラスの名が載っているということもあって、ただの観光ではないと彼は疑われてしまった。

しかし、密命を帯びているのであればわざわざ貴族の血縁を使わないだろう、と扱いかねているようでもある。なんにせよ貴族の子で冒険者というのは、一触即発のこの情勢において、面倒な存在であるらしい。

兵たちは、確認には時間を要すると言う。急ぐ旅でもない。エヴァンは首肯すると、そのまま客室に通された。一応は貴族、ぞんざいな扱いを受けることもなく、見張りの兵に告げれば建物内の移動は自由だそうで、荷物を置くなりエヴァンは門の上部に出てみた。

守衛は面倒そうな顔をしたが、たった二人なら問題はないだろうと通してくれる。門の上部に出ると強い風に煽られて、エヴァンは思わず顔を手で覆った。見渡す限りの山々の

向こうには、ワッカ共和国の街が見える。
　視線を北西の方へと向けると、海と陸の境界が続いており、その先にはハンフリー王国の領土がある。ダグラス領もそこにあるはずなのだが、山にすっぽりと隠されて、全く見えない。
「セラ。どうやらダグラス領は、思っていた以上に小さいらしい」
「はい。大陸全体で見ると、そうですね」
　セラフィナは忌憚ない意見を言う。大抵の従者であれば「そんなことはありません」だとか「要所なのです」だとか、お世辞を述べるのだろうが、彼女は違う。そういったところがエヴァンの気に入っているところでもあり、長年過ごした中で作られた関係でもある。
　西に目を向けると、大海原が広がっているばかり。しかし視界の先には、この大陸とは別の大陸が存在しているという。ダグラス領西の港町から船が出ているらしく、エヴァンもダグラス領を経由する旅人からときおり話を聞いていた。
　そして南にはチェペク共和国。いくつもの村々の近くにはあまり山がないようだが、鉱山からは石炭などが取れるらしく、工業の発展に寄与しているそうだ。
「どうにも鍛冶場のような物が見えないなあ」
　工業大国と聞いていたから、工場が立ち並び、黒煙を吐き出しているような様をエヴァンはイメージしていたが、目の前に広がっているのはいかにも普通の農村なのだ。

「それはそうです。この付近には鉱山がありませんから」
　兵士によれば、大規模な街は鉱山の近くだけで、それ以外は他国とそう変わるものではないらしい。エヴァンと同じようなイメージを持っている人は多いらしく、彼らの対応も慣れたものだった。
　エヴァンがぼんやりと水平線の向こうを眺めていると、隣にやってきたセラフィナの横顔が目に入り、エヴァンは思わず息を呑んだ。
　少し大人びてきた彼女は、しかし変わらず愛らしい容貌をしている。最近は切っていないということで肩より少し下まで伸びていた髪は、風に弄ばれてはためき、きらきらと日を反射してまるで金糸の如く輝いていた。
　そんなセラフィナは目を伏せ、みかん色の髪から覗く狐耳を風に揺らしながら、自然の音に聞き入っているようにも見える。
　そこでふと、エヴァンは周囲の者が彼女の姿を気にしていないことに気がついた。ドワーフたちも亜人とされているから、むしろエヴァンの方がこの国では異端なのかもしれない。
「エヴァン様？　何かありました？」
「色々な国があるものだ、と思ってさ。俺の常識がどこまで通用するのか、不安になったよ」

「常識破りのお方が、何をおっしゃるのです」
「君こそ、しがない貴族の四男坊に何を言うのだろう」
エヴァンがおどけて言い、セラフィナも小さく笑った。

そして国境を越えたのは、三日後のことだった。兵たちは各地に連絡を飛ばしたものの、エヴァンに関する情報は皆無で、ただの観光で来たのだと判明したのである。それもそのはず、エヴァンはチェペク共和国に知り合いなどはいないのだから。
それから農村を過ぎ、国境から一番近い街を経由し、この国一番の鉱山の街に辿り着いたのは、さらに二日後だった。
街は燃えているかのように煙が昇っており、家々の周りにはスコップやつるはしがほったらかしにされている。
行き交う人々は男女共に大柄で、立派な髭を蓄えているのは共通のお洒落らしい。
「……エヴァン様も髭を生やしてみてはどうでしょう？」
「似合わないよ。それに、そこまで伸びるかどうか」
「威厳たっぷりになるかもしれませんよ」
セラフィナはそんな冗談を言い、エヴァンはつるりとした頬を撫でる。まだ若いからなのか、単に体毛が薄いだけなのか、髭は滅多に剃らずに済んでいた。

それからとりあえず宿を取り、鍛冶場と冒険者ギルドを探す。街を歩いているとどうにも埃っぽく、とにかく咳やくしゃみが出そうになる。
一応の目的はあるものの、見るもの全てが目新しく、ついつい寄り道をしてしまう。手先が器用な者が多いのか、ガラス細工などの品は芸術的だ。武骨な彼らの姿とは似ても似つかないから、ひょっとすると観光客に向けたものなのかもしれない。
そうしているうちに、エヴァンの視線が店先に展示されている石人形に留まった。
ゴーレム。本物を見るのは初めてだったから、エヴァンは矯めつ眇めつそれを眺めた。すると店主がやってきて、ちょっとした説明をしてくれる。
魔石を中に入れるとそれが動力源になり、動かすことができるらしい。簡単な命令だけをこなせるようで、命令を出すときには触れて操作する必要があるそうだ。
浪漫に反して便利なものではないようだ、と思いながら値段を尋ねてみると、彼の想像よりもゼロが一つほど多く、とても手が出せそうにない。店主も売ろうとしていたわけではないらしく、異国からの客に豪快な笑いを浮かべた。
それから店を出たものの、エヴァンの頭の中にはまだゴーレムのことがあった。制御魔法の使い手と名高いカール・リンドは、ゴーレムを使っていたそうだ。何か関連があるかもしれないし、後で図書館にでも行って調べてみようと頭の片隅に留めておいた。
そうこうしているうちに、一際大きな鍛冶場が見えてきた。どうやら、何人もの鍛冶師

が集まって仕事をしているらしい。
入り口の方では来客に向けた受付があったので、エヴァンはひとまず話をすることにした。
「いらっしゃいませ、どのようなご用件でしょうか？」
「ええと、この龍の牙を剣の形に仕上げてほしいのですが」
エヴァンがワッカ共和国で予言と共に渡されたそれは、悪鬼を討つ剣になるという。真実味に乏しい話だが、鍛冶師ならば何かわかるかもしれない。
エヴァンが手渡すと、受付の女性は目を丸くした。さもありなん、金属ではないのだから。このような依頼はそうそう飛び込んでこないだろう。
女性は慌てて奥へと駆け込んでいったかと思うとすぐに戻ってきて、エヴァンは奥に通される。中に進むにつれて温度が上がって、彼はうっすらと汗を浮かべた。
来客用の一室で待っていると、すぐに筋骨逞しいドワーフの男性が入ってきた。全身は煤に塗れており、いかにも親方といった風である。
「龍の牙、と聞いてきましたが」
「ええ。このままではなまくら同然。天地を切り裂く名剣に仕上げていただけないものかと」
エヴァンは半ば冗談めかして言ったのだが、職人は一つ唸ると、龍の牙を睨んだ。その

真剣な眼差しに圧倒され、エヴァンは何も言えずに待つことしかできなかった。
それから暫くして、男はエヴァンに向き直った。
「研磨してそれなりの形に仕上げることはできるでしょう。が、生憎とこの硬度の材料を削れるほどの研磨剤はありません」
「それはどこで得られるでしょうか」
男は億劫そうに視線を彷徨わせる。
「エルフのところにいきゃありましょうよ。宝石を削るのが趣味のやつらですから」
そうそっけなく言い捨てると、あからさまな嫌悪を露わにする。ドワーフとエルフの仲はよくないと聞いていたが、本当だったのだろう。
ともあれ、現状ではどうしようもないとわかったので、いずれそちらを当たることにして、エヴァンは腰に佩いていた剣を彼に見せる。日頃から砥石である程度の手入れはしていたが、曲げ直しや本格的な研磨を行ってきたわけでもない。修繕を頼むことにした。
男は剣の状態については何も言わず「相わかり申した」とただ一言告げた。剣の使用法に不満があったのかなかったのか、何も読み取れはしなかったが、職人としての顔だったことは間違いない。
修繕に関しては、そこまで金がかかるわけではない。剣は美術品ではなく、敵を殺すための武器なのだから、使えなくなったら高い値段で修理するより新しいものを買う方がよ

ほどいい。もっとも、彼の剣は家紋が入っているため、そうなる前に実家の蔵にでも放り込むことだろう。

エヴァンは手持ちの剣もなくなったところで、龍の牙を改めて手に取る。ずっしりと重く、棍棒としてはこのままでも十二分な働きをするに違いない。

そんな彼に、立ち上がりかけた鍛冶師が告げた。

「ああそうだ、お客人、龍が死と再生を司ることは御存じで？」

「ええ。少々は」

「それは牙も同じこと、おそらく魔力に反応して破壊と再生を行うことでしょう。詳しいことはわかりませんが」

後で試してみようと頭に留めて、エヴァンは席を立った。

帰り際、併設されている展示品や売り物を眺めていく。見事な剣や槍が立ち並び、鎧が堂々と飾られている。

つい先日、水龍の腹の中で鎧は溶かされてしまったので、今は何も身に着けていない。何か新調したいところだ。筋力も上がった今なら、鉄製の鎧でも問題ないだろう。

手持ちの金は六十万ゴールドほど。観光地であるワッカ共和国でも辺境の街ばかりに行っていたため豪遊することもなく、さほど減ってはいない。

半年近く生活できる額であるそれとて、フルプレートアーマーを買うには倍も用意しなければならないのだから、一流の兵の稼ぎには程遠い。よいものを使うに越したことはないのだが……

なんにせよ、手持ちの金がないのでは話にならない。エヴァンは結局、染みついた貧乏根性のせいか、一番安い鎧を買うことにした。

胸部だけを覆う薄い鉄製の鎧は少々心許ないが、革鎧と比べると遥かに重厚に見える。いよいよ冒険者らしくなってきた。

「エヴァン様、ご立派です！」

「何も変わっていないのに、強くなった気分だよ」

「はい。エヴァン様はいつもお変わりなく」

エヴァンの見た目は出会った頃からほとんど変わっていない。適当に切られた黒の髪、感情のさほど浮かばぬ茶の瞳。衣服も元々高価なものなど身に着けてはおらず、「いつものエヴァン」が立派であるとは言い難い。

しかしそれでもセラフィナにとって、エヴァンは立派な存在なのだろう。エヴァンがセラフィナを誰よりも素晴らしい女性であると思うのと同じように。

ドワーフたちが太めなためか、細身なセラフィナに合うものはなく、彼女のものはひとまず保留にして、とりあえずの目的である冒険者ギルドに赴くことにした。

それから街の中心部に向かって進んでいったが、どうやらこの街は中心に行くほど栄え

るということはなく、万遍なく同じような環境が続くようだ。権威や華やいだ生活より、地に足の着いた日常を好む彼らの性格によるものかもしれない。

やがて辿り着いた冒険者ギルドは、ドワーフの設計らしく、薄汚れてはいるが頑丈そうな建物だった。中に入ると、ドワーフが七割、他国からの者が三割といったところである。

他国からの業務を引き継ぐ手続きを済ませ、依頼を見て回る。剣の修理が終わるまではこの街に滞在することになるため、目ぼしいものがあれば受けておこうと思うのだ。

依頼はやはり、鉱山関連のものが多い。鉱夫としての採掘がメインである他、坑内に出現した魔物討伐など、その種類は多岐に亘っている。季節的なものなのか、あるいは任期的なものなのか、今はどこも人手不足に陥っているという。

エヴァンはその中から比較的期間の短いものを選んだ。二週間ほどの短期で、鉱山内に出没する魔物、鉱山モグラを適宜討伐するという依頼だ。日給は一万ゴールドほどで、さらにその魔物が体内に蓄えている鉱石や宝石の類が加わるようだ。

鉱山資源であれば土地の所有者の物となるが、魔物は所有物であるかどうかが明確に決まっているわけではない。いっときは所有権の主張も盛んであったが、一方で魔物被害の賠償請求をされるため、結局は無主物先占の原理が適応されることになったのである。

よって、この依頼は割と美味しいものだそうだ。

カウンターにて依頼を受けると、明後日の期間開始までることもなくなる。エヴァン

はこの街で情報を集めることにした。

この街には貴族たちに向けた学校というものはなく、これまでの経緯もあってあまりいい印象はないが教会を探すことにする。

暫く探すも中々見つからず、住民に尋ねてみてようやく見つけた先にあったのは、エヴァンの想定外のものだった。

「ここでいいんだよね？」

「はい。どうやらそのようです」

エヴァンはセラフィナと共に、建物の入り口を見る。建物そのものは教会とは言い難く、倉庫や物置としてみれば普通なのだが、その前に立っている銅像があまりにも奇妙だった。

大人の等身大の像なのだが、その男には背から竜の翼が生えており、頭には鬼の角が見え、そして腕は悪魔の腕だろうか、筋肉質には見えないものの異様な力強さがある。教会が崇拝するような神には見えず、むしろ邪悪な忌むべき敵のようにさえ見えた。

中に入っていく者たちもとりわけ綺麗な格好をしているわけではなく、大多数がつなぎなどの普段着姿だ。そのためここが本当に教会であっているのかどうか不安になったので、エヴァンはひとまず尋ねてみることにした。

「あの、すみません。ここは教会であってますか？」

「ええ……観光ですか？　初めてその像を見る方は、大抵そうおっしゃいますよ」

髭のよく手入れされた中年の貴婦人はころころと上品に笑う。

建物は一階建てで、入ってすぐ正面の礼拝堂と、左右にある職員向けの部屋及び図書室という構造になっている。エヴァンは祈りを捧げることもなく、すぐに図書室へと向かう。

ドワーフたちには本を読む習慣がないのか、そこには人もおらず本もほとんど置かれていない。四列ほどの棚だけがぽつねんとおかれた一室で、置かれている蔵書の種類も偏っている。

そのほとんどの内容が、鍛冶や鉱山などこの街に関するもの、そして制御魔法の使い手であるカール・リンドに関するものであった。魔法使いはこの街には似つかわしくないような気がしたが、手にとって読んでいるうちに、そうではないことがわかってきた。

偉大なる制御魔法使いカール・リンド。

瞳の一方は灼熱の業火の如き赤、一方は豊穣の大地の如き茶。背では大陸を滅ぼした竜王から奪いし翼がはためき、額には神に逆らいし大鬼を一太刀の元に切り捨て手に入れし角が聳え、そして闇夜の支配者である大悪魔の残しし腕が揺れる。

数万の鉄人形を引き連れ、その行く手を阻む者は神であれ悪魔であれ、蹂躙し尽くす。人を近づけず、しかしその傍らには常に二人の女性の姿あり。両の瞳にはただの一度も憂いも喜びも浮かぶことはなく、唯一それが煌めくときは、神を滅ぼしたときと言われている。

エヴァンは掻い摘んで情報を得ていたが、カール・リンドという人物はかなり過激な性格をしていたようだ。

記述によれば入り口にあった銅像は彼のものだったらしい。数多の生き物をくっつけたような様はさながらキメラであるが、それが事実であったのか、あるいは過激さを誇張する後世の創作であったのかは判然としない。

そんな人物がなぜドワーフたちに受け入れられているかといえば、カールが残したゴーレムの存在が大きいだろう。機械仕掛けの人形であるそれは、工業やからくりを好むドワーフたちにとって、大いなる興味の対象であったのだ。

ゴーレムについて後世の者が詳しく調べた結果を記したものも多くある。むしろ、カールよりそちらの方がドワーフたちの主な信仰対象と言い換えてもいい。

一般的に、ゴーレムは埋め込んだ魔石をエネルギー源として動いているらしく、「殴る」「物を運ぶ」など、大まかな命令ごとに動かすことができるようである。「手を上げる」といったレベルまで細かく設定されておらず、プログラムの中身もブラックボックスのままなので調整することもできないそうだ。

カールはゴーレムを引き連れて戦ったというから、あえて内部状態を観測できないよう

にしたのだろう。容易く外部から測定されるシステムなど何の役にも立たないはず。

エヴァンは周囲に誰もいないことを確認してから、その場に土人形を生成し、これまで明らかにしてきた運動モーションのモデルの通りに躍らせたり歩かせたりした。セラフィナは楽しげに、そんなエヴァンとゴーレムを眺めている。

複雑な処理をさせるモデルほど時間がかかり、一方簡単にするほど実際の挙動と理想との誤差が大きくなる。あちらを立てればこちらが立たぬ関係にあるため、そうそう都合のいいものは作れない。しかしとりあえず形にする上でさほど重要ではあるまい。

ならば問題は、いかにして自身とゴーレム間で通信を行うかだ。無線のように行うのであれば情報理論など既存の知識でもできるだろうが、それには電流を発生させる必要がある。

一方、この世界で電気がほとんど使われていないせいか、生成魔法に電力を生み出すものは知られていない。

制御魔法による状態の観測は、どうやら外界の情報を魔力に変換して感知しているようなので、その逆変換ができれば電流を発生させることもできるかもしれない。

「エヴァン様、そろそろ……」

セラフィナの視線の先には、こちらにやってくる人の姿がある。エヴァンが魔法の行使を止めると、ゴーレムは、次第に崩れていく。

魔法を使ったことによる消耗はさほど感じられない。随分と魔力が増えたものだ。

やがて暇になると、エヴァンは空いた時間を訓練に使うことにした。

街を出て近くの森を行く。依頼を受けてくればよかったのかもしれないが、そこまで時間を使う予定もなく、すぐ近くで大それた依頼もないだろう。

暫く行ったところで、エヴァンは片手を挙げてセラフィナに敵発見の意を伝える。そこにいたのはオオカミの魔物。通常のオオカミとさほど性質が変わるものではないが、そもそもオオカミは強靭な肉体を持ち、十頭前後の群れで動くという性質がある。

エヴァンは周囲をざっと見回して敵の数を確認、龍の牙を抜いた。彼の背丈よりも長いせいで、木々が入り組んだ状況下では取り扱いにくく、どちらかといえば槍として扱う方がましなのかもしれない。

侵食領域を展開するなり手のひらサイズの石を生成し、いくつかセラフィナに渡しておく。それから自身も生み出した石を手にすると、セラフィナのモーションを利用しつつ、微調整を加えながら敵目がけて振り抜いた。

投擲されると同時に侵食領域内でさらに加速した岩石は、狙いを過たず敵の頭部に命中。そのまま昏倒させる。

オオカミどもが物音に気がつくよりも早く、セラフィナはエヴァンに続く。彼女は機械的に制御していないにもかかわらず、正確な動作で全身の体重を乗せて腕を振る。

素早く放たれた石は、オオカミが自らの死を悟るよりも早く命を奪う。そして残りが一斉に向かってくると、もう一発をくれてやり、迫る一匹を仕留める。

やがて彼我の距離が一太刀の間合いに近づくと、エヴァンは龍の牙の中程を腰のあたりで握り、右半身を前に出して槍のように中段に構える。

向かってくる一体をねめつけ、間合いに入るなり素早く重心を前に移動、穂先にて打ち落とす。と同時、側面から襲ってくる敵に対して素早く半身を引き、重心を後方に移しながら、手にした牙をくるりと回し、石突きで打ち上げる。

セラフィナも近づいた一体を槍の中程で打つと、遥か遠方まで突き飛ばした。それにより周囲の空間に空きができる。

エヴァンは手にした龍の牙をぶん回し、引き気味だった敵の群れをさらに威圧し、一気に退ける。彼を中心に、誰もが近寄らぬ空間が出来上がった。

死んだものを置き去りに、オオカミの群れは息も絶え絶えに逃げていく。エヴァンは追撃しようとも思わず、牙を軽く振って敵の体液を払う。しかし切れ味などないに等しいので、血はついていなかった。

エヴァンはふとセラフィナの視線に気がつくと、わざとらしく牙をくるくると回す。

「俺の槍捌きもそこそこだろう？」

「まだまだです。エヴァン様には、剣の方が合っていますよ」

「だろう、そうだろう。やはりそれはセラ、君でなければ」
そういうエヴァンは、知らず知らずのうちに笑みを浮かべている。悔しさなどない。セラフィナの槍の技術が彼よりも遥か上をいくことは、誇りであり喜びでもある。
剣としては武骨すぎるこの代物をどう扱うべきかと悩みながら、龍の牙を再び背に戻し、エヴァンは敵の残した魔石を拾い上げる。
「さて、とりあえず剣がなくとも問題はないようだ。帰ろうか」
「はい。帰りましょう」
そしてエヴァンは来た道を引き返す。多少力をつけようと、何らかの記憶を得ようと、行いも考えも変わりはしない。これからも彼女とこの旅を続けるだけだから。
エヴァンがセラフィナの手を取ると、彼女もはにかみつつ握り返した。

3

エヴシェン・ホラークは日頃、穏やかな笑みを欠かさない人物であったが、今日は些か事情が異なるようで、慌てふためきおどおどしているようにも見える。
彼の自宅、玄関前にいるのは青年と少女。自慢の息子と娘である。

「トマーシュ、気をつけていくのだぞ。決して油断してはならんが、常に笑みを浮かべていなければならん」
「はい。承知しております。民のため、ひいてはこの国のため。出来得ることを成し遂げましょう」
「おお、その覚悟やよし。だが、無理はするな。お前に何かあっては困るのだからな」
「大丈夫です、ただの視察ですから。大それたことなど起こらないでしょう」
「そうは言うが……」
今日のエヴシェンの姿は議会での優雅な立ち居振る舞いとは違って、息子の出立を前にしておろおろする父でしかなかった。
それから物静かな少女、カリナの頭を撫でてやる。彼女は外で目立った自己主張をすることがなかったが、家族だけのときには愛情を求めて甘えることがたびたびある。
エヴシェンからしてみれば、まだ幼子のようなものだった。とはいえ彼女も十六歳である。そろそろ貴族の娘としては、独り立ちして社交界に出ていてもおかしくはなく、優雅なドレスを身に纏い、言い寄ってくる男性たちを軽くあしらっていてもいい頃だ。
エヴシェンの過剰な愛情の庇護下で育ったせいか、カリナは胸を張って人と相対することができずにいた。そのため、いつもトマーシュの後ろに隠れている。
そんな彼女も今は満面の笑みを浮かべている。父の期待に応えられるのが嬉しいらしい。

「カリナ。何かあったときはトマーシュを頼るといい。嫌になったら、いつでも帰ってきてもいいのだからな」

「ふふ、お父様。それではお兄様が困ってしまいますよ」

「そのときは私が代わりに謝罪しよう。この身など、お前たちのためなら軽いものよ」

事実、エヴシェンはこの国でも一、二を争うほど重要な位置を占めていたが、その全てと我が子を天秤にかければ、あっさりと二人の方へと傾いてしまうだろう。

国に仕える者としては不十分な覚悟かもしれない。しかし、エルフたちほぼ全員が、国の存続にはその象徴たる王族が必要と考えていた。すなわち、エヴシェンとその子たちである。そのため民の彼に対する認識は、国を軽視する者ではなく、次代の希望のためならば我が身とて厭わない慈愛に満ちた英雄なのだった。

やがて親子の別れの挨拶もそこそこに、出発の時間がやってくる。

「では父上、行ってまいります」

「ああ。気をつけていくがいい」

近衛兵たちを左右に控え、トマーシュは優雅に頭を下げる。そして踵を返すと、振り返ることなく堂々と歩き出した。カリナは一歩下がって彼の後を追い続ける。それは相手を立てる淑女のようにも見えた。

エヴシェンが頻りに心配していたのは、彼らが向かう先がドワーフたちの住まう地域だということが理由だった。エルフたちの領内ならば、多少の不都合があろうが、民があれやこれやと世話を焼いて何とかしてくれるだろう。しかしドワーフたちには、エルフの王族に対する特別な思い入れなどない。

馬車に乗った二人が見えなくなるまで、エヴシェンはその姿を追い続けた。

エヴァンはその日、ギルドの依頼のために、街はずれの鉱山にやってきていた。周囲には十名ほどのドワーフが集まっており、他国から来た年若い二人は少々目立つ存在だ。

彼らは同じ依頼を受けた者たちで、多数が古びて廃棄されたと思しき軽鎧に身を包んでいる。予算の少ない冒険者としては一般的な装備だろう。

ドワーフたちは立ち居振る舞いこそ他国の冒険者と変わるものではないが、瞳にはぎらぎらした意欲のようなものが見え隠れしている。ドワーフの気性の荒さが理由かもしれない。

それから依頼の説明があって、ようやく坑内に足を踏み入れることになった。坑口は木枠で囲まれており、崩落を防いでいる。それが丁寧に積み上げられたものであったため、中も安全だろうとエヴァンは安堵するが、進むにつれて支保工は朽ちてしまいそうなほどに古びてくる。

ところどころに備えつけられているランタンの炎が辺りを照らす。露出した岩肌はやけ

に寒々しく、淀んだ空気の臭いが鼻を突いた。

奥から運搬夫がトロッコを押してきて、エヴァンの横を通り過ぎていく。やがて見慣れた光景も少しずつ変わってきて、排水作業に従事している鉱夫の姿も見られるようになってくる。まだそこまで深く掘り進められているわけではないらしい。

ようやく掘削作業に従事している男たちのところに辿り着くと、エヴァンはいよいよ仕事だと緊張を隠しきれなくなった。

鉱山では崩落やガスの危険性など、いつ死が降りかかってくるかわからない。この苛酷な環境は、魔物なんかより余程恐ろしいものであろう。

依頼内容は、出没する魔物を駆除するというものだ。それゆえにこういった掘削には関わらなくてもいいのだが、いつになく体が強張る。

「どうした坊主、びびってんのか？」

「……何分、坑道は初めてなものでして」

「だろうな。が、俺たちにとっちゃ、こんなのは家みてえなもんよ！」

豪快に笑うドワーフの男に、周囲の冒険者たちは窘めるような視線を向ける。今つるはしを振るっている男たちはいい気がしないだろうから、当然の反応だったとも言えよう。

それから各々、周囲の警戒に当たる。偶然、魔物の巣を掘り当ててしまうこともあるそうで、油断はできない。

が、それよりも早く、別の危機が襲ってきた。岩肌からゆらりと姿を現したのは、長い胴体を持ち、舌を出し入れするマムシ。街は遠く、毒が回ってしまえば処置が遅れることになる。

エヴァンは飛び退くと、背にした龍の牙を抜く。そして間髪を容れずに一撃を叩き込んだ。

一瞬、弾力があったものの、すぐにそれはなくなる。胴体を押し潰され真っ二つになったマムシが地に落ちる。たかが爬虫類を相手に過剰な反応だったかもしれない。

そんなエヴァンの姿は、マムシ程度なら手掴みにしてしまう鉱夫たちからは、もやしっ子に見えることだろう。が、魔物の脅威となれば、また別である。

エヴァンは牙についた血を拭い去り、気を引き締めていく。

それから暫くは何事もなく時間が過ぎていった。これほど楽な仕事があっていいものだろうかと思い直し始めるほどである。

しかし、そうした油断が胸中を掠めたとき、坑道を揺るがす衝撃が起きた。鉱夫たちは一斉にその場を立ち退き、魔物の危機を叫ぶ。

エヴァンはセラフィナと現場に向かって駆け出す。そして次の瞬間、岩壁が開かれ、肌色に近い鼻先が突き出した。その根元には毛に覆われた小さな瞳。

ガラガラと音を立てて岩が崩れ、土を掻き分けるのに適した大きな手が現れた。頭部の

左右に現れたそれには鋭い爪が生えており、強い力で掘り進んでくる。

数名の冒険者たちが集まってくる中、エヴァンは龍の牙を正眼に構えた。周囲には十分な空間があり、振り回すのに何の障害もない。

人の背丈ほどもあろう茶褐色の頭がようやく出て、それからずんぐりとした胴体が一気に飛び込んでくる。その動きは丸々とした図体からは到底考えられないほどに素早い。

鉱山モグラ、と呼ばれる魔物だった。

先手必勝とばかりに、冒険者たちが飛び込んだ。剣を掲げ、思い切り振り抜く。が、敵の方が一枚上手であった。

頭部を素早く動かし、大きな手をばたつかせて襲い来る者たちを振り払う。爪は鉄を切り裂くほどに鋭く、その力は巨岩を払うほどに強い。

一撃を食らった冒険者は怯み後退するも、すぐさま体勢を立て直して剣を掲げる。が、そのときには既にモグラの方も移動を終えている。

どこかに頭を突っ込んでいないと気が済まないのか、あちこちをほじくり回し、岩石を辺りに撒き散らす。胴体が半ばまで埋まるとようやく安堵して、地面を這いずるように辺りの探索に乗り出す。

しかしそれは身動きを取りづらくしたに過ぎない。背後に回り込んでいた冒険者が、鋭い一撃を放った。ジタバタともがくモグラの短い毛の内側の、肉の深くまで刃が突き刺さる。

いよいよ、鉱山モグラは自身の作った穴から飛び出し、近くにいた冒険者どもを叩きのめし、周囲を駆け巡った。

そしてエヴァンのところに真っすぐ向かってくる。彼は牙を構えたまま、微動だにせず敵を見据えた。

短い手足を頬りに動かし、土を巻き上げ小石を弾き飛ばす様は、竜巻をも連想させる。抵抗しようもないと思われるほどの圧倒的な勢いを前にして、しかしエヴァンは踏み込んだ。

直進してくる敵には迷いも躊躇いもない。一瞬のミスが命取りになる。だが、エヴァンはその位置こそが適切だと思った。

真正面。

モグラの手足は外側に向かってついており、非常に短い。土を掻き分けるのに適している反面、眼前にある獲物を両側から捕まえる動きを取ることができない。それゆえに隙ができる。だが、それも体を一ひねりされるまでの一瞬だ。

エヴァンに気負いはなかった。ゆっくりと、龍の牙を上段に構える。そして背後にセラフィナを控えたまま、強く地を蹴り一気に跳躍した。

彼我の距離が一瞬にして縮まる。エヴァンは強い風を感じていた。

それは正面から吹きつけてくる、敵が生み出す乱気流。そして自身を駆り立てる後押しの風。

眼前を敵の爪が横に薙いでいくのを合図に、エヴァンは手にした牙を振り下ろした。

刃筋も刀線も刃波も、もはや関係ない。武骨な龍の牙がもたらすのは純粋なる衝撃。

真っ向から当てればよい、ただそれだけのことだ。

それゆえにエヴァンは真正面から振り下ろした牙を、力の限りに打ちつける。その軌跡は見事な弧を描いた。

鉱山モグラの顔に一撃。敵の突進を止めるのには十分であったのだろう、ぴたりと両者の動きが止まった。が、力が拮抗していたわけではないことがすぐ明らかになる。

急に互いが動き出す。エヴァンは渾身の一撃を叩き込んだ後でバランスを崩し、鉱山モグラは痛みに頭を引っ込める。

そこに誰よりも早く切り込む影がある。槍が炎に照らされて、鈍く輝いた。銀の穂先は敵の片手の付け根を抉り取り、互いに次の手を出しかねていた拮抗状態を破る。

エヴァンは好機と見て、鼻先に一撃を加えると、その反動を利用して素早く後退する。

鉱山モグラの無事な方の手が未練がましく追ってくるが、可動範囲の外であり、届きはしない。

一度動きを止めた敵には、冒険者たちが群がるようにして、四方から飛びかかっていた。

鉱山モグラは胴体を切られ、後ろ足を刎ねられ、そして心の臓に刃が突き刺された。

悲鳴が上がる間もなかった。硬直したように仰け反ると、もはや最後の足掻きさえできずに、地に横たわる。

冒険者の一人が勝鬨を上げた。それにつられて、他の者たちも声を上げる。

珍しい、とエヴァンは彼らを見遣る。冒険者たちにとって、勝利を共有しようなどという考えはほとんどない。エヴァンもすっかりその考えに慣れており、頭の中にあるのは、この鉱山モグラが魔力に戻った際に生じる魔石をいかに多く手にするか、あるいは何か残った素材――たとえば宝石などを誰よりも先に得るか、といったことである。

このモグラは一体だけなので、戦利品があちこちに分散することはない。そのため、魔石が生じるときを今か今かと、エヴァンは周囲の警戒もそこそこに待っていたのだ。

やがてモグラは腹の中に蓄えていたのか、いくつかの鉱石とそれなりに大きい魔石を落とす。

エヴァンとセラフィナは先陣を切って、それらに飛びかかった。外聞などはもはや気にしてはいない。そもそも、金のために働いているのだから。

一方、冒険者たちは行動を起こさなかった。エヴァンはその隙に手当たり次第に戦利品をかき集めていく。それからようやく他の者たちもエヴァンの方を見て、慌てたように火事場泥棒に参加するのだった。

ここの冒険者にそういった習慣はないのだろうかと思ったが、基本的に無主物先占の原理はどこの国でも同じだ。

冒険者たちは先走ったエヴァンに文句を言うこともなく、小言を呟きながら守備に戻っていった。やがて連絡が行き届くと鉱員たちが戻ってきて、何事もなかったかのように掘削を再開する。

どうやら、鉱山モグラの作った穴を利用するようだ。その巣穴を辿っていけば、いくつか宝石などもあるかもしれないが、魔物が落としたものと元々存在していたものの区別がつかないため、冒険者が権利を主張することはできない。

エヴァンは鉱員たちの護衛も兼ねて、穴の奥を覗きに行く。支保工のない穴はいつ崩落してもおかしくない状態で、この穴から別の魔物がひょいと顔を覗かせても何の不思議もない。

深く無秩序に掘られ、入り組んだ道を進む。鉱員たちはときおり、坑内図に何かを書き込みながら穴を調べている。

結局、その日は他に何事もなく、エヴァンの仕事は終わった。坑道から出てきたときには既に日も暮れつつあり、これから男たちは街に戻って一杯引っかけるに違いない。

地下から出るなり、エヴァンは大きく深呼吸する。空気がおいしいと感じるのは、こういう体験でもしなければ経験できないことだ。

夕暮れ時、街へと歩いていく男たちの姿は、くたびれているようにも活力に溢れているようにも見える。

「セラ、帰ろうか」

「はい。夕飯は何にしましょう？」

「今日は遅いし、どこかで食べていこうか。臨時収入もあることだし」

「ではそうしましょう」

エヴァンは薄汚れていたが、手をズボンで拭いてから、そっとセラフィナの手を取った。彼女もまた頬に煤がついている。エヴァンが拭うと、セラフィナは小さくはにかんだ。

それから汚れた互いを見て、笑い合った。

その晩、エヴァンは宿の酒場で夕食を取ることにした。既に夜も遅いので大抵の店は閉まっている一方、ドワーフたちは酒豪が多く、酒場はどこも賑わっている。とはいえ、エヴァンは酒を飲む気などなく、セラフィナは未成年。店からすれば、奇異な客だろう。

今日泊まる宿で食事を取ってもよかったのだが、そこは大多数の宿がそうであるように、メニューが酒とちょっとした肴程度しかなかった。たっぷり働いた後の晩餐には物足りないので、食事だけは別のところで取ることにしたのである。

次の日はこの宿に泊まってもいいかもしれないなどと思ったが、安宿なので個室はなく、

相部屋で雑魚寝しなければならないのだ。

ハンフリー王国で一度だけ依頼の最中に雑魚寝をしたことはあったが、あれは敵襲に備えたものであって、それぞれ武装したままであり、仮眠に近いものだった。

しかしここではそうではない。庶民の大半は貞操観念に乏しく素っ裸で寝るだろうし、隣に病気持ちがいた場合は最悪だ。それに人が増えてくれば床で寝る者も増えてくるし、物を盗まれたり寝首をかかれたりもする。

何より、そんな状況下にセラフィナを放り込むことなど考えられなかった。万が一襲われたところで容易く返り討ちにできるだろうが、そうはいってもまだ十四歳なのだ。精神的な傷は残したくない。それゆえに、宿は少々値が張るものの、個室で風呂つきのものを選ぶようにしている。

エヴァンはテーブルを挟んでセラフィナと向かい合い、料理が運ばれてくるのを待つ。高い宿ではなく飯も安いので、味はほとんど期待できないだろう。しかし腹はぐうと鳴り、周囲の料理の香りが流れてくるだけで、涎が出そうになる。

「それにしても、坑道というところは、すごい場所でしたね」

「そうだね。あんなところに一年中通い詰めるのは俺には考えられないや」

「私もです。空が見える場所がいいですね」

「死ぬにしても、埋まって死ぬよりは、死んでから埋められたいよ」

立ち読みサンプル
はここまで

そんなシャレにもならないことを言っていると、前菜の野菜の盛り合わせと、煮豆のスープが運ばれてきた。

「いただきます」と、声を揃えてから、それぞれ料理に手をつける。野菜には粉チーズがまぶしてあり、簡素な味付けではあるものの、口中に広がる香りが食欲をそそる。

それから煮豆のスープを啜る。大して具も入っておらず薄味なのだが、すっと熱さが喉元を過ぎると、腹の底に心地好い温もりが広がっていく。

ふう、と一息つくと、ようやく今日の依頼をこなしたのだという実感が湧いてきた。

「鉱石、いくらくらいになるだろう？」

「どうでしょう。私には見当がつきません」

「高く売れるといいね」

鉱石の中に綺麗なものがあればセラフィナにプレゼントしようと思っていたが、さほど価値のありそうなものはなく、中にはただの石ころではないかと疑われるようなものも多い。

そうしてのんびり過ごしていると、周りの噂話も耳に入ってくる。エヴァンは酒場には滅多に来ないが、最近の話題を追うにはいい場所なのかもしれない。

「なあ、お前聞いたか？　エルフの王子様が来るんだってよ」

「はー、なんだってこんなとこに来るんだ。あのいかにも綺麗な空気以外耐えられねえっ